



2030年に向けて
世界が合意した
「持続可能な開発目標」です



一般社団法人地域連携ネットワークみえ

三重県伊勢市御薗町長屋1963

(株)エホリューション内 (☎0596-63-5080 FAX0696-65-7006)

E-mail info@3c-mie.net <https://3c-mie.net/>



猛暑、酷暑、激暑と、どんな表現をしてもむなしいほどの気候が続き、もはや日本の四季は大きく変容しています。そんな環境の中、あつさはあつさでもフランスの空の下で繰り広げられた、熱きアスリートたちの活躍は感動をたくさんいただきました。世界の中では紛争がまだまだ続いています、スポーツの戦いは国を越えた友情を生むものです。

感動は人を動かします。自分も何にかに挑戦してみたい。そんな気持ちにさせるほど選手たちの清々しい笑顔や悔し涙は何物にも代えがたいメッセージがありますね。今は甲子園に注目です。

さて、こうした報道の一方で、絶えない災害の報道も続いています。

最近では、これまでにない水害、突発的な災害が発生しています。

8月は、終戦記念日ということですが、戦争は人間が引き起こすもの。自然災害は、地球の環境が引き起こすもの。

自然災害は一時収まっても、終わりはありません。南海トラフ地震も近いと言われている中、今一度意識して考えてみる必要があるように思います。



先月7月25日からの大豪雨で、秋田、山形、栃木、新潟の4県で人的被害、住宅被害が発生しました。また、今月8日には、日向灘を震源とする地震が発生、宮崎県日南市で震度6弱が観測されました。

日本海から北日本へのびた梅雨前線に向かって、暖かく湿った空気が流れ込んだことにより、7月25日ごろから山形県、秋田県、北海道などで大雨となりました。25日午後には、山形県酒田市及び遊佐町に大雨特別警報が発表されました。

この大雨では、山形県、秋田県、北海道の10以上の地点で、降水量の観測史上1位が更新されたそうです。24時間雨量の頻度は、秋田県南部で「10～100年に1度」、山形県では最上川流域を中心とした広い範囲で「100年以上に1度」と稀に見る規模とのことでした。

近年、日本全国で水害が多発しています。水害が発生した場合でも、命や財産を守れるように、個人も企業も事前に自分事としての水害リスクをよく把握し、適切な対策を行うことが重要です。水害リスクの確認や水害対策の手順については、日頃からみんなで話し合っておく必要があります。



令和6年7月秋田県豪雨



令和6年7月山形県豪雨

昨今の異常気象は、地球温暖化によるものと言われています。ここ10年間の世界平均気温は、世界の工業化前と比べて約1.09度上昇しており、なんと北極圏では世界平均の約2倍の速度で気温が上昇しているそうです。

将来予測では、今世紀末の世界平均気温の変化予測は、+1.0～5.7度と予想され、年平均降水量は10年前と比べて約13%増加するとされ、世界規模では地球温暖化が1度進めば、極端な日降水量の強度が約7%上昇することが予想されています。

最近では、「ゲリラ豪雨」という言葉が、一般的になっています。夏場は、特に大都市でのエアコンや自動車の排ガス、ビルのコンクリートやアスファルト舗装が取り込んだ太陽熱など人の活動による排熱でまわりの地域よりも3度から4度も気温が高くなっています。そのため強い上昇気流が生まれ、積乱雲を発生させやすくするといわれています。

また、「線状降水帯」という言葉もよく聞く言葉となりました。これは、積乱雲のできている大気層に新たな積乱雲が次々と発生し、带状に連なり大雨をもたらす現象を指しています。



今月8日午後4時43分ごろ、日向灘を震源とする地震は、宮崎県日南市で震度6弱の揺れを観測されました。気象庁によれば、震源の深さは約30キロ、地震の規模(マグニチュード)は7.1と推定されるとのことでした。

同庁は愛媛、高知、大分、宮崎、鹿児島各県に津波注意報を発令するとともに、南海トラフ地震との関連性について調査を開始したとの臨時情報を発表し、宮崎港では、50センチの津波が観測され、九州から四国各地でも津波が観測されました。

原子力規制庁によると、四国電力伊方原発(愛媛県伊方町)、九州電力川内原発(鹿児島県薩摩川内市)はいずれも地震による異常はないということですが、予断は許されません。

「南海トラフ地震臨時情報(巨大地震注意)」発表

「巨大地震注意」は、巨大地震が発生する可能性が「ふだんよりも」高まっていることを示す情報です。

楽観することはできませんが、一方で過度に恐れる必要もありません。国は南海トラフの巨大地震が、今後30年以内に70%から80%の確率で起きると評価しています。これを1週間以内に換算すると1000回に1回ということになります。

一方で、過去の世界の大規模地震の統計データでは、マグニチュード7.0以上の地震が起きたあと隣り合った領域で1週間以内にマグニチュード8クラス以上の地震が発生する頻度が数百回に1回程度あるということがわかっています。

つまり、ふだんは1000回に1回の確率が数百回に1回になっているということです。また、『巨大地震が特定の期間に絶対起こるというものではない』ことにも注意が必要です。

11日は、宮崎市で震度3、M4.5が観測されています。



出所:日経新聞

いまさらですが、震度とマグニチュードを正しく理解しましょう

震度	震度階級(人が感じる揺れの強さ)
0	人は揺れを感じない
1	屋内にいる人の中には、揺れをわずかに感じる人がいる。
2	屋内にいる人の大半が、揺れを感じる。電灯などのつり下げ物が、わずかに揺れる。
3	屋内にいる人のほとんどが、揺れを感じる。棚にある食器類が音を立てることがある。
4	ほとんどの人が驚く。電灯などのつり下げ物は大きく揺れ、座りの悪い置物が倒れることがある。
5弱	大半の人が恐怖を覚え、物につかまりたいと感じる。棚にある食器類、書棚の本が落ちることがある。
5強	大半の人が、行動に支障を感じる。固定していない家具が倒れることがある。
6弱	立っていることが困難になる。ドアが開かなくなることがある。壁のタイルや窓ガラスが破損、落下することがある。
6強	立っていることができず、揺れに翻弄される。固定していない家具のほとんどが移動し、倒れるものが多くなる。
7	固定していない家具のほとんどが移動したり倒れたりし、飛ぶこともある。



なぜ、10階級なのに震度は「7」までなのでしょう？

日本で初めて震度を決めたのは明治時代で、微震、弱震、強震、列震の4段階だったそうです。その後、6段階を経て8段階(無感、微震、軽震、弱震、中震、強震、烈震、激震)となり、これが数字の0から7までの表示になったそうです。さらに1995年の阪神淡路大震災以降に気象庁は震度6と5をそれぞれ強弱の2つに分け全体で10段階にしました。しかしこれは、日本だけだそうで世界のほとんどは12段階の国際的震度になっているそうです。

マグニチュードは、地震のエネルギーで地震の規模を表す尺度です。

マグニチュードの値が1増えると、その地震のエネルギーは約30倍、2増えると約1,000倍、3増えると約32,000倍になります。

ここ5年で震度6以上の地震の発生状況

発生日	震源地	震度	M
2024年8月8日	日向灘	6弱	7.1
2024年4月17日	豊後水道	6弱	6.6
2024年1月1日	能登地方	7	7.6
2023年5月5日	能登地方	6強	6.5
2022年6月19日	能登地方	6弱	5.4
2022年3月16日	福島県沖	6強	7.4
2021年2月13日	福島県沖	6強	7.3
2019年6月18日	山形県沖	6強	6.7
2019年2月21日	丹振地方中東部	6弱	5.8
2019年1月3日	熊本地方	6弱	5.1

あとがき

これからは台風の時期です。台風5号も東北地方に上陸！日本は災害大国です。一人ひとりが十分な備えをしましょう。